

戦争体験と食料難について

山下迪也

はじめに

私は「戦争体験と食料難」について、他人に話をしたことがありません。それは忘れたたい記憶で、思い出すと自然に涙が出てしまうことと、皆さんのように、平和な社会に生活している人に分かって貰えないと思ったからです。

それでは、何故、話す気になったのかと言うと、私の人生も終わりに近づいたのと、数年前に、ある旅先のホテルの朝食バイキングで、私の前に並んでいた大学生が、競争して食べ物を取る。私はそんなに食べられるのかなと思いながら見ていると、案の定、たくさんの食べ残しを置いて出て行きました。食べ物を大切にすることも必要ですが、彼らの「人生観」を疑いました。特に戦中・戦後の食料で苦しんだ人々を思い出し、悲しくなりました。過去にあった「戦争体験と食料難」を皆さんに知って欲しいと強く思いました。

私は自分が体験したことを、皆さんに話しますので、聞いてください。

戦争体験

戦争当時、私たち家族8人（祖父母2人・母親・5人の男子）は東京の新宿に住んでいました。昭和20年3月10日の東京大空襲で多数の死者が出たことから、母親は安全な場所へ疎開することを考えていたようですが、実現できませんでした。

新宿大空襲は昭和20年4月4日の夜、起こりました。B29襲来、空襲警報のサイレンが鳴ると母親は長男（14歳）にリヤカーに布団を積み3歳の弟を載せ、3人の弟を連れ逃げるよう指示しました。歳老いた祖父母と一緒にでは助からないと考え、子供たちだけでも助けようとしたのではないかと思います。

私たち5人は暗闇の中を逃げましたが、その途中、B29からガラガラと大きな音をたてて、焼夷弾が落ちてきて火の海になりました。誰も火を消そうとした人はいませんでした。

「助けて」という声もありましたが、逃げるのに精一杯、私はここで死ぬんだなと思いました。死の恐怖で歩けなくなり、兄は「歩けなければ置いていくよ」と言いながら、リヤカーに乗せてくれました。リヤカーの上でも、火と煙の熱風が吹き、呼吸するのも苦しく、そして、火の粉が大量に降る中を逃げ、夜が明けて、私たちが住んでいた場所に戻りました。そこは一面、焼け野原で何も残っていませんでした。誰もいません。母が何処にいるかわかりませんので、待っていて再会できました。

森の中にある小学校が焼けずに残り、約3ヶ月程、教室で生活しました。私たちは着るものも、食べる物も有りません。遊ぶところは焼け跡、5人の兄弟が中心、勉強はできず、6月下旬に福井県武生（現在の越前市）に疎開しました。

食糧難

私は母親から「戦時中、お前は食べ物がなく腹をすかせているのに、『おなか』をこわし下痢していた」と言われました。私自身、胃腸が弱かったのか、分かりません。

昭和 20 年 6 月下旬、福井県武生（現在の越前市）の叔母の家に、私たち家族 6 人が住むことになりました。ここから厳しい食生活が始まりました。「配給」は滞り、野草を取ったり、イナゴ、タニシなど食べられる物は全て食べました。都会から農村へ食料を買い求める「買い出し」、衣類など持って行って野菜や米と交換してもらう。お金を持っている人は、ヤミ市で米など買う大変な時代でした。

9 月から 2 学期が始まりましたが、週 2 回程しか弁当を持って行けませんでした。朝食がご飯の時は芋や野菜も入っているけど可能で、すいとんやおかゆの時はだめ。昼食時、校庭の隅で遊んでいました。1 クラスで数人いました。また弁当が盗まれる事件が発生、犯人は都会から来た連中だと見られ差別され、遊び仲間は大阪や名古屋から来た人や外国人でした。ただ 1 回だけお正月に、母親の実家（福井県朝日町）に行き、白いご飯と餅を食べました。

戦争中・戦後の食料不足は深刻で、ある人は戦争で一番辛かったのは「ひもじさ」。死ぬ前に、腹一杯、白いご飯を食べたい。あるテレビの朝ドラで、法の番人が「法律」を守り、配給だけの生活で、栄養失調で死んだ。

アメリカの食料援助などあり、昭和 24 年以降、徐々に回復していきました。

最後に

みなさん、私の話を聞き何を感じたでしょうか。戦争体験は 6 歳の時、食料難は 6 歳から 9 歳まで。ただ食料難については、地域差があり、佐倉ではあまり不足していないようです。

現在の日本の平和と繁栄は、たくさんの犠牲（戦死者・家屋の焼失など）のうえに成り立っているのではないのでしょうか。

日本では約 79 年間、平和が続いていますが、ロシアとウクライナの戦争、イスラエルとハマスの戦争などが続いています。人と人が殺し合う戦争ほど悲惨なものはない。国際連合が機能していない。

日本は二度と戦争をしてはいけない。